

相対主義哲学の誤り

認識を、「本体」の認識かその不可能のいずれかしかないと考える

※「本体」……「客観」「真理」

哲学の「普遍洞察」の考えを、「絶対的認識」と考え、独断論あるいは形而上学として批判
むしろ、世界観と価値観の多様性こそが存在すべきなのだ

しかしこれは顛倒した考え
てんとう

むしろ、こう考えなくてはならない。言語は世界を写す「鏡」ではありえず、ただ世界の「絵」を描くことができ
るだけだ。普遍的な社会「原理」を必要とする「自由な社会」だけが多様な価値観を可能とすると。

近代以後の「市民社会」それ自身を矛盾に満ちたもの、ある場合には人間の自由を抑圧、排除する支配のシステムとして描いた

しかしこれが最大の誤り

この前提によってポストモダン思想は、ただ現状の批判のみに終始して、矛盾の克服の方途をまったく示すことができなかった。

ポストモダン思想

自由な市民国家

近代哲学者の構想による「近代市民社会」は人々が生き方の自由を求めるかぎり、つまり価値の多様性を望むか
ぎり唯一無二の社会原理である

人々の一般意志による統治をその正当性の根拠とする

しかし

近代国家の現実には、資本主義が特定階層の独占的支配のツールとなり、その民主主義的統治の正当性を浸食し、
破壊している。

それゆえ

「自由な市民国家」の正当性の概念にもとづいて現在の状態が批判され、克服されねばならない。

※ホッブズ……「普遍戦争」↓強力な**統治権力**(国家)……(戦争の抑止の原理)

※ルソー……「社会契約」と「一般意志」↓**民主主義**

普遍交換によって諸国家を互いに富ませる経済システムは、国家間の共存を可能とする経済システムでもある

↓**資本主義**

現代の資本主義社会が直面している大きな困難は、「近代市民社会」の原理の本質的な欠陥に由来するのではな
く、むしろ「自由な社会」の原理が本質的な仕方では歪曲されていることに由来する。

その最大の理由は、現代の資本主義システムが、市民社会による制御の手を離れて、覇権の原理として自らを貫徹
しつつあるという点にある。

人間と社会は、自然世界の固定的な「事実」の領域ではなく、いわばたえざる「価値生成」の領域、つまり「本質」
領域である。↓哲学的な普遍認識の可能性のカギを握るのは、**価値の哲学的方法的な基礎づけ**である。

近代社会の経済システム